

## 言語活動をとおして科学的社會認識を育てる授業研究

### I 主題設定の理由

社会認識とは、社会の事象・事物の本質を客観的に把握することである。この場合、社会科学の手法に基づくので、「科学的社會認識」ともいわれている。(大森照夫著「新社会科教育基本用語辞典」；明治図書)社会を「科学的」に認識するとはどうすることかは、社会科の教科としての性格に関わる基本的問題であり、立場によって論がわかれている。大きく3つの流れがあるとされる。

- ①社会科で目標とされる社会の「科学的」認識は、具体的には「事象や出来事の社会的意味を正しく理解する」ことである立場
- ②「実生活で直面する具体的問題を解決する」ことであるとする立場
- ③社会的事象を科学的に認識する立場

である。(森分孝治著「社会科授業構成の理論と方法」：明治図書)

本部会ではこれまで、上記の3つの流れを理解しつつ子どもたちに「科学的社會認識」を育成することめざして授業研究を進めてきている。

### II 研究の内容

#### (1) 研究の柱

- どういった社会事象を子どもたちに提示するのか、基礎・基本の定着をどう進めるのか。
- 子どもたちが事実認識や事象間の関係把握、事象の持つ社会的意味の考察などを進めるときに、教師はどのような指導や支援を行ったらいいか(発問や板書、資料の提示・活用等)
- 子どもたち一人一人の社会認識の深まりをどのように見取るか(学習の評価)、教師の授業のふり返り(子どもたち一人一人の社会認識を育てる授業だったか)をどのように行うか(授業の評価)
- 子どもたち一人一人に社会科のもつ面白さや楽しさを味わわせる授業をどのように創造するか。

実践をもとにした研究を進めるために、研究授業における事実をもとに研究を進める。また、各部員が自分の実践や地域の教材について調べたことを持ち寄り、指導案を作り上げることで、よりよい実践になるようにした。

(2) 授業実践研究(八幡小5年 畠山忠教諭 2月) 「森林とわたしたちの暮らし」

(3) 教材研究・情報交換

(4) 臨地研修(山梨市根津記念館)

### III 成果と課題 <小学校部会>

- (1) 地域素材等、各自の実践報告が資質の向上につながった。
- (2) 授業研では五感を使った資料で児童の意欲を高めていた。
- (3) 指導案の指導計画に社会的な見方・考え方を提示できたのはよかった。科学的社會認識を深めることにつながる。
- (4) 少ない人数の中で、全員で研究を進めることができた。来年度はもっと部員を増やしたい。
- (5) 指導案の検討を2回にすることで更に授業に生かせるのではないか。
- (6) 小・中の交流(授業参観を含めて)ができたことにより社会科の系統性がつかめた。

(小学校部長 那須栄樹 塩山南小学校)

# 「科学的社會認識を育てる授業研究」～身近な資料を用いた授業研究～

## I 主題設定の理由

科学的社會認識の過程においては、事実認識・関係認識・主体認識の3つがある。この主題のもと、授業研究の実施、臨地研修、学習会、各自の授業実践の報告、情報交換等、これまでの研究を継承する形で進めてきた。科学的社會認識を獲得するために必要な方法を研究することにより、次のような生徒の育成につながるものと考え研究を進めてきた。

- ① 学習課題に主体的に向き合える生徒
- ② 追究すべき課題を明確にとらえることのできる生徒
- ③ 自ら、また他者と協力して考えを深め、客観的な判断を下すことのできる生徒
- ④ 出した結論を様々な資料や他者の意見を参考にしながら検証できる生徒

生徒にとって身近な資料を活用することは、「その結果」を導き出す際の大きな手がかりとなるはずであり、それは科学的社會認識を育てるための一つの手段ともなるのだと考えた。「見通し」と「振り返り」を重視し、学びの繋がりを実感できる授業づくりも模索し、研究を進めてきた。

## II 研究内容

### (1) 授業研究の実施

8月31日(水) 授業者：金森 淳 教諭(塩山中)

中学3年生 公民的分野 題材：「合計特殊出生率からみる今後の日本を考える」

### (2) 臨地研修〔2回〕… 8月：「伝統的建造物群めぐり」(甲州市塩山上条地区)

11月：「帝国インキ株式会社山梨工場の見学」(山梨市牧丘町)

### (3) 各自の授業実践の報告 ※授業研究に向けて一人一実践を持ち寄り、指導案の検討を行う。

### (4) 学習会 「ワインの発祥について」(甲州市教育委員会 小野正文 先生)

### (5) 情報交換

## III 成果と課題<中学校部会>

○学習会では、その道の第一人者とも言える講師の先生からお話を聞いたことは有意義であった。身近な題材について私たちが知っているようで実は奥が深く、考えさせる教材、教員自身が学べる資料提供であったので、今後の教材研究に大いに活用ができる学習会であった。

○小中の交流を図る授業を見合うことができた。また、現状を学び、自分たちの地域の未来像の一端を話し合わせるにより、社会科という教科としての魅力について再認識することができた。

○寺社や文化財のみならず地域に根差した企業の訪問・工場見学を臨地研修に取り入れたことは有意義であった。特に、ものづくりだけでなく、人づくりの大切さを知る、時代の先を見通す企業の先見性など社会科教員として学ぶべきことは多かった。

○授業案検討では、全員で資料や授業案を持ち寄り、チームとして取り組み、「少子化とは何か」ということについて相互の意見を出し合う中で科学的社會認識に必要な要素を考えることができた。

▲3年サイクルの研究として、来年度にどのようにつないでいくのか、その内容を確認する必要があり、臨地研修については計画的に決めていった方が良いと思う。

(中学校部長 武藤英紀 松里中学校)